

今こそ見直したい みなとと観光 2

株式会社JTB総合研究所主席研究員 中根 裕

みなとまちの観光資源の 活かし方、育て方



ニューツーリズムと着地型観光

いまから10年ほど前からだろうか、観光、旅行分野で「ニューツーリズム」という言葉が使われだした（図1）。以前から国内旅行が団体から個人志向へ、旅行目的も物見遊山型から目的型、成熟型へ変化していることは指摘されていたが、旅行の目的やテーマが多様かつ専門化してきたことを総称してニューツーリズムと呼ばれだした。典型的な例が知床半島や屋久島などの素晴らしい自然資源をガイドと共に歩くエコツアー（エコツーリズム）や、都会の人達が農村を訪ね農業体験や農家民泊をおこなうグリーンツーリズム等である。これら以外にもテーマは多種多様であるが、共通するのは地域に根付いた地域ならではの自然、文化、伝統、歴史等々を深掘りした旅行と言える。しかし特化したテーマの旅行に対する需要は“誰しもが満足”とはいかない。そのテーマに興味関心がある人だからこそお金と時間を出

せる訳であるから、自ずとニッチなマーケットに限定されることとなる。ただしマーケティングの原論ともいえる「イノベーター理論」（Everett M. Rogers／米国）で指摘される2.5%のイノベーター（ニッチ層）でも、マーケットの経験や感性、興味が成熟してくると一般にも拡散するケースがありうる。観光におけるニューツーリズムも同様で、限られたマーケットで始まって、より一般の観光客へつながら芽となる可能性を持っている。

一方で同じ頃から「着地型観光」という言葉が使われだした（図2）。これは観光旅行の目的やテーマではなく、観光に対する体制や仕組みの話である。第二次世界大戦後、日本は戦災復興から驚異的な経済成長を果たしたが、観光・旅行の分野でも急速な発展を見せた。ただし当時は“旅行に行ける余裕ができる”ことがひとつの目標であり、旅行に行けたこと自体で満足できた時代だった。著名な観光地や温泉地を“いいとこ取り”して効率よく周遊できる

ニューツーリズムとは

テーマ性が強く、人や自然とのふれあいなど体験的要素を取り入れた新しいタイプの旅行

現在では旅行は目的から手段となっており、
テーマやこだわりのある旅のニーズが高まっている。

ニューツーリズムの経験・認知と参加意向

ニューツーリズムの参加経験は伸びているが認知度は下がる二極化。
参加意向は増加傾向。

（出典：「旅行者動向2016」財団法人日本交通公社）

認知と経験

■ 行ったことがある ■ 知っているが行ったことがない ■ 知らない

エコツアー（単位：％）



グリーンツーリズム（単位：％）



産業遺産旅行（単位：％）



国内の世界遺産旅行（単位：％）



今後の参加意向

■ 是非してみたい ■ してみたい ■ あまりしたくない ■ 全くしたくない

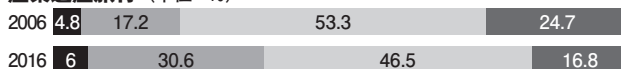
エコツアー（単位：％）



グリーンツーリズム（単位：％）



産業遺産旅行（単位：％）



国内の世界遺産旅行（単位：％）

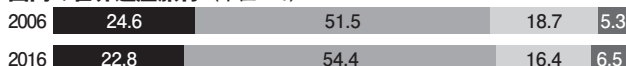


図1 ニューツーリズムへの変化

	発地型観光	着地型観光
企画する場所	●大都市圏（発地）	●受入地域（着地）
対象層	●マスマーケット	●限定したターゲット
企画のイメージ	●多くのお客様が満足する 最大公約数的な企画	●地域の特徴を生かした 独自性の高い企画
特徴	●お客様のニーズの高いメジャーな 観光素材をツアー化 ●視察型のツアー	●地域の隠れていた魅力を発見し、 ストーリーとして商品化 ●体験型、交流型のツアー

着地型観光とは、地域の目線で企画することで、
地域の特徴を存分に生かした独自性の高い観光のスタイル

図2 着地型観光とは

ことが問われ、それに対し旅行会社が企画するパッケージ旅行が広がった時代でもあった。大手旅行会社はその需要拡大の流れに乗って急成長したが、東京、大阪などの大都市（発地側）中心で旅行商品を作り上げていた。しかしマーケット側の経験・意識が成熟化してくると、自分の興味にあった旅行や、お仕着せでなく、自分個人で見たい地域を回る旅行ニーズが高まり、全国一律のパッケージ旅行では満足されない時代となってきた。一方、地域の側で見ると経済成長は大都市への集中を呼び起こし、地方の過疎化が問題視され始めた時期でもあった。地方の活性化は今でも地方創生として重要課題であるが、地方を活性化するエンジンとして観光が注目され始め、地域の人々（着地側）が観光資源の発掘、商品化、販売などに踏み込むことで地域経済の活性化を図ろうとする動きが全国で始まっている。大都市中心旅行商品づくりを発地型とするならば、この地域主体の取組を着地型観光と呼ばれている。ニューツーリズムのような地域に根付いたテーマ性や専門性を活かした旅行は、地域の人達だからこそできる部分が多く、着地型観光で旅行商品づくりに地域にコミットすると、おのずと地域らしさを活かしたニューツーリズムとなってくる。そして着地型観光によるニューツーリズムの観光資源は、いわゆる自然資源や寺社仏閣などの人文資源だけでなく、地域に根付いた産業や匠、生活文化・伝統など、地域のあらゆるモノ、コト、コトに可能性が潜んでいる。

みなとまちと観光の問題は今に始まった話でない。しかしこうした地域らしさを再度掘り起し、地域の人達が作り上げる観光の視点で、もう一度見直す価値はあるはずである。



土木インフラも観光資源になる

近年、ニューツーリズムの一つのテーマとして「インフラツーリズム」と言われた。ダムや道路、橋梁などのインフラ施設を観光の対象とする旅行である。国の立場でもインフラ整備を所管する国土交通省は、インフラツーリズムのポータルサイトを立ち上げ、新たな観光のテーマとして普及に取り組んでいる（<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/infratourism/>）。

実はインフラ施設が観光資源となった例も古くから存在する。外国人観光客に人気の立山黒部アルペンルートの黒部ダムなどは典型であり、港湾施設でも東京湾を渡るレインボーブリッジや小樽、函館のレンガ倉庫等、既に人気を博している施設も数多い。インフラ施設を観光面で活かすには、主に4つのタイプに分けられる（図3）。まず①のタイプ、インフラ施設自体が観光対象となるには、その規模やデザイン、機能などが抜きん出ていることが必要であり、黒部ダムは現在でも我が国最大のアーチ式ダムである。そして最近②のインフラの土木工事現場が観光対象となっている例が見られだした。そもそも土木工事現場は地味なイメージがあり、安全面から一般には閉ざされていた。しかしそのダイナミックさや最新土木技術に接することができる点と、何よりも工事現場を見られるのは工事期間中だけである点が評価される背景にある。さらに③の歴史遺産としてのインフラ施設も各地で注目されている。京都へ琵琶湖から水を運ぶ琵琶湖疏水は現在でも京都に水を供給しているが、観光対象としても活用が図られている。また昨年新潟市では市内信濃川を渡る萬代

土木観光のタイプ	主な事例
① スケールや形態、機能で優れた土木インフラを観光する	●黒部ダム（富山県） ●本四架橋 ●東京スカイツリー（東京都墨田区） ●首都圏外郭放水路（埼玉県）
② 土木インフラの建築工事現場を観光する	●「東京湾トンネル」おとなのトンネル工事現場見学（東京都） ●東京外かく環状道路親子現場見学（千葉県） ●秘境八十里越体感バス（新潟県）
③ 歴史的な土木インフラを観光する	●琵琶湖疏水の発電施設（京都府） ●通潤橋（熊本県） ●祖谷のかずら橋（徳島県）
④ 土木インフラを他の用途で活用	●神岡レールマウンテンバイク（岐阜県） ●碓氷峠「アプトのみち」（群馬県） ●札幌大通り公園での雪まつり（北海道）

図3 インフラツーリズム（土木観光）のタイプ

黒部ダム



「黒部ダム」は今でもアーチ式ダムとして日本最大で高さ186mもある…
昭和31年建設開始当時の金額で513億の巨費が投じられ、
7年の歳月を経て完成した…

『これには感心させられる…』『これは勉強になる…』

しかし、これだけでは感心するが感動は？

延べ1,000万人の技術者が関わり、破碎帯から大量の冷水が噴出という難工事は
171人ももの殉職者の犠牲によって完成した…

そうした背景、時代、人々の関わり、物語を知り、訪れるからこそ感動する

図4 インフラの背景には物語あり

橋開通130周年の記念事業を行い、観光面の活用が地域のテーマとなっている(<http://www.2159.go.jp/bandaibashi/>)。

最後の④のタイプはインフラ施設本来の用途が終わったものを観光面で活用するものである。港湾インフラでも各地で煉瓦倉庫がレストランや店舗等に転用され、ドックもイベント・展示空間として活用されている。

これらのタイプは異なっているけれども、評価を得ているインフラツーリズムの魅力には共通する点がある。それは単に構築物を見て感心するにとどまらず、そのインフラが作られた時代と地域の社会背景や技術・匠、そして作り上げた人達の苦労や犠牲といった物語があり、それらも思い描きながら観光することである。観光客が黒部ダムから得るものは、その規模・形態の素晴らしさだけでなく、世の中が戦後の復興に取り組む中で、多くの技術者が関わり殉職者までも出し映画にもなった、というインフラの物語があるからこそ感心が感動に昇華するのである(図4)。みなとまちのインフラと地域の発展の陰にも、そうした物語が必ず隠れているはずである。



都市の魅力とみなとまち

みなとまちは基本的に都市である。もちろん漁港を抱える漁村もみなとまちではあるが、都市港湾はひと、モノの発着流通拠点として都市の発展を支えてきた。ここでニューツーリズムの一つのテーマとして「都市観光」に着目したい。都市に存在する観光資源・施設単体による魅力だけでなく、都市には様々な歴史と蓄積あるだけに、それぞれの都市ならではの魅力が隠れているはずである(図5左段)。近年、まち歩きにスポットをあてたムック本やテレビ番組が見られるが、それは都市の何気ない片隅で魅力を発見することに面白みがあるのだろう。都市の魅力とは新たな施設開発や再開発だけによるものではない。むしろ都市それぞれの歴史や文化、産業、土地利用そして市民生活の中に発見がある。普段見慣れている市民には当たり前の風景や伝統でも、外部から訪れた観光客にとっては自分の街や生活、文化とのギャップとして映り魅力を感じるのである。これらの既存の都市機能や施設を結び付けて成功した事例として八戸市（青森県）の“あさぐる”があ



地域の人と接するとさらに楽しみは倍加する

加えて

都市観光の楽しみ	みなとまちの取り組み整備例
町や界隈・路地を回遊する楽しみ	港と市街地の繁華街、下町に歩ける仕組み、歩行者空間
建築や町並みをめぐる楽しみ	古き岸壁、堤防、倉庫建築物の保全と新たな活用
海や川など街の自然にふれる楽しみ	水際部に近づく場の環境整備、水上交通の整備、海から眺める街の景観づくり、出船入船を見ながらのオープンカフェ
人を見たり見られたりする楽しみ、ファッションの楽しみ	人が認識できる距離（100m程度）の対岸風景を生かす、人が憩い集まる場の整備
買物や市場をめぐる楽しみ	個性ある商品・人・商店街づくり、地元が買い物にくる市場、フリーマーケットの創出
地域の味覚・料理を味わう楽しみ	洒落たレストランから土地の料理、屋台まで
文化・芸術・伝統にふれる楽しみ	港を背景としたアーティスト、パフォーマー、イベントの開催
祭りや行事を見たり参加する楽しみ	祭りや行事の掘り起し、祭りや行事への参加、港湾の敷地の利用規制緩和
イブニングライフの楽しみ	夜景をつくる、夜の活動の充実、夜の人口を増やす、港に面した宿泊施設の整備

図5 都市観光の楽しみと、そこから見えてくるみなとまちの整備

げられる（図6）。八戸市は東北新幹線が停車する都市であるが、昔から観光で著名な都市ではない。しかし漁港としては東北有数の水揚げを誇る拠点港であり、そこで開かれる地元向けの朝市は活況を呈していた。一方八戸市はビジネス客にとって宿泊拠点であり、市内に多くのビジネスホテルが存在する。そこでビジネス出張族に向け、港で開催される朝市で新鮮な魚介類の朝食を提供し、さらに市内で営業する銭湯に入る、それらをビジネスホテルから地元のタクシーがピックアップする、というサービスが評判を呼んでいる。決して新たな整備や投資を図った訳ではなく既存の資源・施設が連携したものであ

る。ビジネスホテルの定番の朝食と風呂よりも朝市で新鮮な朝食をとり、大きな銭湯で朝湯に入りたい、という潜在ニーズを地域が引きだした成功例である。地域らしさを活かすという点では八戸の港に毎朝新鮮な海の幸があがり、その朝市は地域の住民が利用していることがポイントである。決して観光客目当てでなく地域の売る側と買う側の生業や賑わいがあり、そこに観光客も触れることができることが最大の魅力であろう。

みなとまちには都市としてもインフラとして見ても、そして人々の生活文化の面でも、みなとまちならではの個性や魅力があるはずである。先に示した9つの都市観光の楽しみでみれば、ハードソフト両面でみなとまちらしい取り組みが浮かんでくる（図5右段）。基本的にハード部分で言えば、港湾の護岸、倉庫、橋梁などの新規整備と共に、古きインフラ施設を地域の物語と共に保全、転用活用を図ることである。土地利用面では都市市街地との連担による歩ける都市観光の港づくりとなるだろう。また陸上から港を眺める景観づくりも大切だが、水上交通などで海上からの都市の姿に触れることは、観光客のみならず市民にとっても新鮮なわが街の風景と映るだろう。そしてそれらを活かすには八戸市の取り組みのように、地域の人々の生活や生業と港が連携し、観光客も触れることができる機会と場づくりが勘所と言えるだろう。

港まちの生活文化資源(朝市・銭湯)が観光商品化した『八戸あさぐる』

あさぐるのながれ【津朝市・朝ふる満喫コースの場合】

タクシーがホテルまでお迎え！ 朝市 散歩 スッキリ気分でお泊り！

※前日22時までに宿泊ホテルにお申し出ください。
※料金はタクシー乗務員へお支払いください。

中心街ホテル発着 タクシー料金 + 銭湯入浴券 ▶ 3,100円

八戸駅前ホテル発着 タクシー料金 + 銭湯入浴券 ▶ 4,300円

※上記料金には朝市での飲食代金は含まれておりません。

図6 八戸あさぐる
http://www.hachinohe-cb.jp/asaguru/about/index.html